コメント＝梶山正人
解　説＝吉田章宏

写　真　川島　浩
発行者　斎藤草子
発行所　一莖書房

《解　説》

甦る斎藤喜博先生のお姿

――四半世紀前の録音を聴いて――

吉田　章宏

いま再び、恐らく何十回も聞いたことのある、この録音テープを、目を閉じ耳を澄ませて、聴いたところです。あの日の、あの教室に立ち戻っているような思いがしました。今から四半世紀も前の、ある冬の日のことです。あの教室の様子や、斎藤喜博先生の全身を駆使してのご指導のお姿が、目の前にありありと甦ってくる思いがしました。

この録音を、いろいろな脈絡でお聴きになる方々が、理解を深めるご参考になるように「解説」を書くのが、私に課せられた役割です。そこで、この授業の状況や背景を、思い浮かぶままに、以下に記し、ここでの私の役割を果たすことに代えたいと思います。

録音されているこの授業の斎藤先生は、指導を受けた生徒たちとは、恐らく、初対面であったかと思います。いわゆる「受験校」とされているエリート・スクールの「中学三年生」たちです（「中学三年生、随分柔らかいです」と、その場での斎藤先生のお言葉にあります。元のテープには「中学二年」と記録されています。どちらであったかを確かめる術は、私には最早ありません）。テープに記されている日付は一九七五年一月二十五日となっています。つい昨日のことのようにも感じられる

のですが、もう四半世紀も昔のことになります。よく晴れた、うららかな暖かく柔らかな日差しの一日でした。普通の教室より広めの音楽室の正面の黒板を背に、生徒たちは、横に二列になって、確か、四つのパートに分かれて、並んで立っていたかと思います。机と椅子は、教室の後部に寄せ集められて、生徒たちの前には、教室の半分に近い空間が用意されていました。私は、その空間を隔てて生徒達と向かい合う位置に、正面の黒板に向かって左側の窓際近くの木の椅子に腰掛けていました。後に述べますように、この録音をしたテープ・レコーダーは、その窓際の縁に、目立たないように置かれていました。授業は、確か、午前中だったように思います。

さて、子どもたちは、最初、音楽の授業に熱中しているようには少しも見えませんでした。言わば、音楽の授業があるから音楽室に行けと言われて、仕方がないからやって来た、といった様子でした。音楽は、あの子どもたちには、比較的軽んじられている教科なのだ、と思ったことが、私の印象に残っています。事情があって、音楽担当の先生も、担任の先生も、その時、教室にはお見えになりませんでした。ですから、斎藤先生には、言わば「飛び入り」で、初対面の子どもたちに指導をなさる場であり、初対面の子どもたちにとっては思いがけない音楽指導を受ける場であった、ということになります。

録音を聴きながら、私の目に浮かんで来る、様子を描いてみます。

斎藤先生は、靴紐でなくて布ゴムで締まる、真っ白いズックの、薄い靴底の、軽い運動靴を履いていらっしゃいました。これは、もちろん、先生が身軽に動けるためでもあります。が、さらに、真っ白な靴を選ばれたのは、指導のために教室中を動き回る先生の足の動きが、子どもたちの目に鮮明に見えるように、ひいては、身体全体の動きがよく見えるように、との配慮からだということを、私は、先生から、繰り返し伺っ

ていました。後になって思ったことですが、そうした配慮は、能の世阿弥の『風姿花伝』に記されている「離見の見」を想起させるものです。さらに、身体の動きを見えやすくするために、先生は、身体の線、ことに肩の線がよく見える、首筋からすぐ袖に続く緩やかな裁ち方の、いわゆるラグラン型のグレーのシャツをわざわざ探して特別に購入して、召していらっしゃいました。合唱指導で、子どもたちの目に分かりやすくするために、それ程までの心遣いをしていらっしゃったことを、いま懐かしく思い起こします。そして、既に、数えてみれば、六十五歳に近い先生だったわけですが、授業での指導に当たっては、身体の動きは実に柔らかで軽やかでした。教室空間を縦横に、リズムとアクセントをもって、舞踊でもなさるかのように、流れるように動いていらっしゃいました。そして、四十五分間の授業が終わるころには、文字どおり、汗びっしょりになっておられました。教室の中で、身体を一番動かし、一番汗を流しておられたのは、誰よりも、ほかならぬ斎藤先生だったのでした。

あるいは、合唱指導に、なぜそんなに身体を動かすのか、と疑問に思われるかたもいらっしゃるかもしれません。先生は、ご自分の身体の動きを使って、子どもの身体の動きを誘う、ということをなさっていたからだ、というのも、一つの理解だと思います。たとえば、身体を柔らかく、ということを指示するにも、「肩の力を抜いて」とか、「足の力も抜いてね」、「胸をこう拡げて」とか、「背中を伸ばして」などとおっしゃるときにも、決して言葉だけでそれを指示するのではありません。そうおっしゃりながら、ご自分も、子どもの方を向いて、子どもの目に見える仕方で、肩の力を抜いたり、胸をぐっと大きく拡げて見せたり、背中を伸ばしたり、などなさりながら、そうおっしゃるのです。またたとえば、子どもに口を大きく開いて息を吸うことを指導なさるときには、録音にもあるように、「あくびと同じでいいですよ。あくびする。大きな

あくびしてください。」などおっしゃいます。「あくび」の「あ」の音にアクセントを置いた独特の言い方で、おっしゃるのですが、それと同時に、ご自分も、顎がはずれんばかりに、大きく口を開けてみせて、子どもたちに、大きく口を開けて、深く呼吸することを促されるのです。子どもたちが、先生の大きな口の開きように、瞬間、思わず笑いを漏らすということがよくありました。しかし、先生がご自分の身体で示された大きな口の開きように、子どもたちに最初あった恥ずかしさやらためらいも直ぐに消えて、安心して、それぞれに、生まれて初めてかも知れぬと思われるほど大きく口を開いて、思いっきり大きく深く息を吸うことを始めるのでした。女のお子さんの中には、大きく口を開けることを、ためらうお子さんもあったようです。でも、次第に、全員が、先生と競うように大きな口を開いて、深く吸うことを始めるのです。子どもたちの声が澄んでくるとともに、表情にも、堅さが消えて、素直さが生まれてくるように、私には感じられました。緊張が破れるふとしたことに、明るい笑い声が漏れて、教室に一体感と柔らかさが生まれます。時には、先生は、自ら右手で拳固をつくって、それを口に入れてみせて、それほどに大きく口を開くのだ、ということを実演して見せることも、なさいました。それは、子どもたちのためらいを除く指導でもあったのでしょうが、さらに口を大きく、ということを、端的に伝える具体的な行為でもあったのだ、とも思われます。そんな風に、先生は、ご自分の身体をフルに使って指導をなさったのです。

例えば、録音の中で、斎藤先生は「吸って」という声を繰り返し掛けていらっしゃいます。実は、先生は、身体を動かさず、ただ声だけを掛けていらっしゃる、ということではないのです。ここでも、先生は、ご自分の身体をフルに使って指導なさっているのです。「吸って」と声を掛けながら、必ず、ご自分の両手あるいは右手を、手のひらを上に向け、

あるときは大きく長く、あるときは小さく短く、下から上へと持って行き、頭の高さくらいのところでヒラリと手のひらを返して、つぎに、その手を前に向けて柔らかく押し出す、という滑らかな流れの動作を、繰り返し繰り返しなさっているのです。CDのジャケットにある、斎藤先生のお写真は、生徒たちの息が、吸いから吐きへ移る瞬間の、先生が手の平を返して両手を柔らかく押し出す瞬間、その直前の瞬間の動作をとらえた写真であるかのようにも、先生のあの動作を見慣れた私には、感じられます。

普段は浅くしかしていない呼吸を深くするというばかりでなく、さらに、緩く吸ったり、急に吸ったり、あるいは、緩く吐いたり、「ハァー」と、急に吐いたり、と自由自在に呼吸をおこなうことを、子どもたちに求められました。そして、そのたびに、先生ご自身も、その手を下から上へ持って来て前に押し出す動作を、緩くゆっくりとおこなったり、急に早くおこなったり、と自由自在に、ご自分の身体を駆使なさっているのです。そして、そのために、子どもたちに、身体を柔らかくすること、身体全体をつかうことを、求められたのです。あるいは、逆でもあるのかも知れません。呼吸を自由自在にすることを通して、身体を自由自在に駆使できるように柔らかくする、ということもあったのかもしれません。ともかく、自分の身体を、自分の意志で自由自在に駆使できるようになることを、先生が、とても大事になさっていらしたことが思い出されます。これは、体育の授業でも同じでした。跳び箱を美しく跳べるようになることの意味の一つは、咄嗟の危険な場合にも、自分の身体を自由自在に駆使して、大切な自分の身体を護ることができるようになることだ、とおっしゃったことがありました。

呼吸の深さを、息を止める時間を時計で計って、二十秒とか、二十五秒とか知らせ、「一分は止められますよ」と、目標を提示する、という

ことを、この授業でもなさっています。こうした、その場で、時計を使って持続時間を示すという具体的な仕方で、子どもに語り掛ける、ということは、音楽、体育ばかりでなく、国語の授業などでも、斎藤先生がよくなさったことです。

さて、身体が柔らかくほぐされて、深い呼吸ができるようになると、それまで「ハァー」と言って呼吸していたところに、「ア」の音を入れて、音階に沿った、発声練習が始まりました。この「ア」の音は、阿吽の呼吸というときの「阿」の音でもあるのだと思います。そして、「ア」の音で、「ア、ア、……」と発声しながら、音を高音へと上げていきます。その度に、先生は、「おなかを拡げて」、「口を開いて」、「はい、吸って」と声を掛けていらっしゃいます。発声練習は、呼吸練習の継続であることがわかります。発声が美しくなるのは、身体が柔らかく、身体全体を使っての呼吸が深く自由自在で、したがって、息に余裕があるときなのでしょう。

こうして、練習が進んでくると、子どもたちの、「仕方なしにやって来た」という腰の引けた、中途半端で投げやりな表情はすっかり消え去って、「もっと吸って」など、先生が指示される具体的な課題の一つひとつに、熱中して取り組む様子が見えて来ます。弱いパート（この授業の場合は、女子の中音（アルト）のパートであったのですが）には、「女の人は口が開かないんです。もっと開いてください」とか、「吸っていないでしょう。ここの角の人。見ているだけなんだ。いいですか、はい、吸って。」などと、その場で、深く吸っていない子どもへの呼びかけの声が、直ぐに掛けられています。「手を組まないでね」とか、黒板に「寄り掛からないで」とか、子どもへの指示は、極めて具体的です。瞬間瞬間の生徒の状態を的確にとらえ、その状態に合わせて、その時々に的確な注文、注意、指示が絶えず掛けられています。一時間のなかでの、先

生のそうした言葉の多いことには、今更ながら驚きます。いや、一時間の指導は、そうした具体的な言葉で埋め尽くされている、と言ってもよいでしょう。

また、見逃されてはならないことは、その場で、よい方向への変化が子どもに現れたときには、すかさず、すぐに誉める言葉が掛けられていることです。たとえば、「はい、いいですよ」、「とっても、いいですね」、「非常に柔らかいですね」、「よく出ているね」、……などです。斎藤先生が説かれた「見る／見える」ということが、そのことを可能にする基盤となっているのでしょう。その具体的な姿が、ここに示されているように感じます。

先生は、こんなことをよくおっしゃっていました。教師が、その教材で、子どもに注文を掛けられなくなったら、それが、その教材の指導の終わりである、と。しかし、この授業では、教材とも言うべき合唱曲「ある朝、若者が……」の内容の指導に入るずっと以前のところで、指導は終わっています。歌詞の意味の深く豊かな解釈とか、その解釈に基づく多様な表現というような所まで行くだけの時間が、この授業にはとても無かったのです。それよりもまえの、比喩的に言えば、恐らく、種を蒔くために、荒れ地に鍬を入れて耕すというような性格の仕事として、呼吸と発声の指導をなさっていたのだ、と私は感じます。

合唱曲「ある朝、若者が……」は、その学校から子どもたちが参加する合唱コンクールか何かに向けて練習している課題曲だったようです。斎藤先生が、指導のために選んだ曲だったというわけでは、決してありません。斎藤先生にとっても、この曲は、恐らく、初めての曲だったのではないか、と思われます。

斎藤先生は、合唱指導に指揮棒を用いることは、私の知る限りでは、ありませんでした。素手で、指先の形を微妙に変化させながら、流れる

ように滑らかに、指揮をなさっていました。発声練習で、音階に沿って次第に高い音へと、誘って行くところでは、子どもたちが発声する一音一音に対応して、先生は、子どものところから、少しずつ後ずさりしながら、右手を、胸の辺りから斜め後ろ上方に頭よりも高くへと、しなやかに運ばれるのでした。それは、あたかも子どもたちの声を、絹の糸か蜘蛛の糸か何かを紡ぎだし、引き伸ばすかのように、引き伸ばそうとするような仕草で、滑らかに、繰り返し繰り返し、右手を運ばれるのです。それを見ている私たちは、子どもたちの声が、先生の右手の指先に留まって、それが引き伸ばされて、高く細く美しい声が出て来ているのだ、というような錯覚にふと襲われることがありました。

斎藤先生は、ご自分が声高らかに、子どもと一緒に歌う、ということはなさいませんでした。しかし、教室中を動き回りながら、一緒に小さな声で歌っていらっしゃるかのようにも感じられました。

前述のように、最初は、いやいや音楽室にやってきたという様子が見られた子どもたちだったのですが、四十分ほどの練習の間に、呼吸にも発声にも、潤いと余裕が出てきました。身体全体を柔らかく使い、口を大きく開いて、深い呼吸に支えられた、美しい声の混声合唱を経験していた子どもたちは、授業が終わる頃には、晴れ晴れとした明るい笑顔となり、足取りも軽く、音楽教室を去って行ったのでした。

ひところ、斎藤先生の指導を、あたかも手品か魔術でもあるかのように期待する向きがあったことがありました。が、それは、手品でも魔術でもなかったのです。子どものその時の状態を良く見て、的確にとらえ、その状態に対応し、その状態から出発して、適切な指導により、それをさらに少しでも豊かにするということ、まさしくそれだったのです。それにしても、この貧しい録音でも、最初の子どもたちの発声と合唱と、四十分間の指導の後のそれとの間の、歴然とした差は、否定することは

困難でしょう。この授業は、合唱指導そのものはこれからやっと始まるというところで、終わっています。でも、合唱の一番の基礎にある、呼吸と発声の指導の様子を、このような形で繰り返し聞けることになったことは、やはりとても良かった、と私は思います。

録音の最初の部分で、五分間ほど、合唱のテンポを指導なさっていらっしゃる先生がいらっしゃいます。この方は、音楽教育の専門家の方でした。斎藤先生の指導は、この方による指導が終わったところで、「とっても綺麗だったね。随分綺麗ですね。それでね、……」という言葉で始まります。誤解のないよう、蛇足ですが、ここに申し添えておきます。

さて、何らかの差し障りがあるといけないので、学校名、同席していた人々のお名前、などを、ここでは、すべて匿名とすることにします。そのことは、どうかお許しください。また、どうか、そうしたことは、詮索なさらないでください。もちろん、この指導はある学校のある状況のもとでおこなわれたものであり、決して、真空状態でおこなわれたものではありません。しかし、私たちが、読者と共に、耳を傾ける焦点は、あくまでも、斎藤先生の指導と子どもたちに起こっていることに、絞ることにしたいと願うのです。

実は、斎藤先生は、ご自分の授業を録音することを、他人にお許しになっていらっしゃいませんでした。授業の写真を撮ることさえも、許していらっしゃいませんでした。写真については、子どもたちの授業への集中を妨げるから、また、参観者や研究者は、写真を撮ることなどに心を奪われるのではなく、授業そのものに全身全霊を集中すべきである、というのがその理由でした。同じ理由から、逆に、たとえば、川島浩カメラマンが写真を撮ることは、当然のことながら、許していらしたのです。しかし、録音を禁じることについては、その理由はおっしゃらなかった、と思います。録音などしなくとも、授業のすべての流れが一度で

頭に入るようにならなければいけない、とは、繰り返しおっしゃっていたことでした。が、そこには、先生らしい含羞（はにかみ）もあったようにも、私には思われます。また、指導の断片をとらえてする無理解な外部の人々の批判を嫌われた、ということもあったかも知れません。ともかく、録音は許しておられなかったのです。私は、それなのに、先生のお許しも得ずに、敢えて無断で録音をしたのでした。私は、音楽の素人として、その場では直ちにはとらえ切れないことがあまりにも沢山あるということを、自覚していました。そこで、録音しておいて、それを何回も聴くことで、何事かを少しでも分かりたいと願い、どうしても、その録音を欲しいと思ったからでした。しかし、先生のお許しを得ないで録音したものであることから、この録音のあることは、それ以来、口外しておりませんでした。ただ独り、この録音に繰り返し聴き入り、一つひとつの指導の言葉の意味について、折りに触れて、考え続けて来たのでした。

ご本人の許可を得ずに録音したこと、そのことは、亡き斎藤喜博先生に、ここで、まず、深くお詫びをしなくてはいけない、と思います。その責めは、私が負わなくてはならない、とも思います。しかし、仮にもし、その時、お許しを得ようと、真正面から願い出たとしたら、先生は、恐らく許されなかったであろうことも、また確かであったのです。「それは、止めておきなさい」ときっぱりとおっしゃったに違いないし、「録音などせずに、よく見、よく聴いてください。」とおっしゃったに違いないのです。そして、恐らく、その場の録音は、止めるほかなかったに違いない、と思われます。ただ、私が黒い布の袋を持参していたこと、そして、それがテープ・レコーダーであることに、先生は、既に気づいておられたようにも感じます。そして、先生は、それに気づかない振りをしておられたようにも感じるのです。敢えて咎め立てすることは、な

さらなかったのだ、とも感じるのです。斎藤先生には、そういうところが、おありでした。

それはともかく、これは、先生の許可も得ずにした録音なのです。しかし、その無許可録音のお陰で、今日、その呼吸と発声の指導の一端が、このように、四半世紀近くの歳月を経て、先生の指導の現場を彷彿とさせる肉声と臨場音として甦ることになりました。

そして、斎藤先生ゆかりの一莖書房から、CDとして、刊行されることになったのです。そのことを、不思議なこととも思います。また、たとえ許されずとも、私としてはとても嬉しく思うのです。今となれば、斎藤先生も、きっと、あの澄んだ美しい温顔で、笑って許してくださるのではないか、とも思います。そして、そう私は信じたい、とも思います。

録音の状態は、お聞きの通り、極めて悪いものです。悪いのが当然です。放送局のスタジオなどで見られる現代の高度に進歩した録音装置による録音技術に比べたら、話にならないような酷い状態で、録音されたものだからです。録音に用いたのは、二十五年を経たいまも、私の手元に在る、高さ二十センチ、横三十センチ、厚さ七、八センチ程の、AIWA MODEL TPR-602-2 BAND CASSETTE RADIO RECORDER に内蔵された、小さなコンデンサー・マイクを通して録音されたものです。しかも、先生にも、参加者にも、目障りにならないようにと、録音機は黒い薄布の手提袋に入れてありました。音は、その薄布の覆いを通して録音されたのでした。

私は、音楽を聴くのが大好きです。LPやCDで、クラシック音楽を聴いて、勇気を奮い立たせたことも、感動して、独り涙したこともあります。授業公開研究会での子どもたちの合唱の澄んだ歌声に、文字どおり胸が打ち震えて、感動の涙が止まらないという経験も幾度もしました。

しかし、私は、音楽や音楽教育の専門家では、全くありません。音楽には、ずぶの素人であり、いわゆる「音痴」でもあります。で、音楽や音楽教育について、解説めいたことをする資格は全くない、と自覚しています。そこで、私がこの「解説」を書く立場は自ずから定まりました。一つには、

（1）この指導の場に臨場して、この録音を無許可で為した「張本人」として、記憶に留めているその現場の状況を記すこと。実は、私が、斎藤先生の指導の現場に臨場したのは、この録音の場だけではなく、一九七一年暮れから一九八〇年夏までほぼ十年の間、当時の教育科学研究会の教授学部会と、それが発展した「教授学研究の会」の実践研究活動の一環として、北海道から九州まで、斎藤喜博先生にお供して、多くの学校を訪れ、この録音にあるような指導現場の見学と観察を重ねるという経験にも、私は恵まれていたのです。そこで、

（2）そうした経験を背景に、私の心の眼に見えてくることのいくつかにも、触れること。そしてまた、

（3）長年に亙って、授業を、現象学的心理学の立場から研究して来た私の立場から、気づいたことを記すこと。以上、三つの立場から、気づいたことを、いくつか述べてみたという次第です。

読者の方々が、録音から直接の学ぶことの、邪魔になることのないように、と恐れを抱きながら、何かのご参考になればと思い、以上を記しました。ご参考になれば、幸いです。

（東京大学名誉教授・川村学園女子大学教授）